

教科主張

社会科の本質

子どもは社会的事象に出会うと、自らの目的をもち、観察や調査、資料の収集や分析などの追究を始める。その過程で、社会的事象の背景にある人の営みに目を向けながら、その工夫や努力、苦心などについて考えることで、その人の生き様やその根底にある願いといった情意に気づき、社会的事象を再解釈していく。このように、社会的事象に携わる人の情意に思いを致していくことで、子ども自身の情意も揺さぶられ「本当にそうなのか」「このままでよいのか」などと自ら問い、社会的な見方や考え方を働かせながら、社会的事象について自分なりに価値判断していく。そして、子どもは社会に生きる人々の様々な工夫や努力に心から感動したり、自身の成長を実感したりしながら、自らの価値観を更新するとともに、生活や行動を見つめ直していくのである。

以上のことから、私たちは社会科の本質を、次のように考える。

子どもが社会的事象の追究を通して社会認識を深め「将来にわたって自分とみんなの幸せを実現していくために、自分はどう生きていくか」を問い続けること

社会科の考える『その子らしく学ぶ』とは ～人間性の涵養につながる経験～

子どもはそれぞれ、これまでの生活経験や感性、価値観に支えられた、その子ならではの見方や考え方で社会的事象に向き合う。社会的事象と結びつき、そこに携わる人の情意にふれて心を揺さぶられたとき、子どもは事象を客観的な「状況」としてではなく、自身にとって意味をもつ「情況」として捉えるようになる。こうして生じた「心の動き」は「本当にそうなのか」「このままでよいのか」といった切実感を伴う問いを生み、子どもが社会的な見方や考え方を働かせながら情意や思考をめぐらせ、社会的事象を再解釈し、価値判断をくり返していくことにつながる。さらに、教室内で関わり合う他者との対話を通

して、自らが構築してきた社会認識にあらためて正対し、異なる考えや価値観と出合うことで、その認識を一層深めていく。こうして子どもは、新たな気づきを得たり、自らの生き方を見つめ直したりしていく。この一連の追究過程は、その子自身が構築した、その子ならではのプロセスともいえるだろう。

以上のことから、私たちは社会科における『その子らしく学ぶ』を次のように整理した。

社会的事象に出合ったその子が、生活経験に裏打ちされた感性をもとに、明らかにしたくなった問いについてじっくりと追究していくことで、社会的事象について再解釈・価値判断し、その子が自分自身の社会認識を深めたり、現実社会における自分自身の生き方を見つめたりしていくこと

さて、一般に社会科は、社会的事象の追究を通して社会認識を深めるものであるとされるが、その社会を形成しているのは一人ひとりの人間であることは言うまでもない。したがって、社会的事象を追究するにしても、社会認識を深めるにしても、そこには人間理解が伴っていることが大切なのである。だからこそ、私たちは感性や情意といった、人間性にかかわるものも研究の対象としてきた。このように考えると、そもそも社会科という教科自体が人間性の涵養と密接不可分なものであるといえよう。

以上のことから、社会科部では「人間性の涵養につながる経験」を、社会科という教科の特性に照らし合わせ、次のように定義することとした。

社会的事象との結びつきによってその子の中に生じる情動をもとに、その子ならではの情意や思考をめぐらせ「自分とみんなの幸せを実現していくため」の判断をくり返す中で、新たな気づきを得たり自らを見つめ直したりする経験

私たちは、こうした経験を重ねる子どもを支えていくことが、社会科における『その子らしく学ぶ』の実現につながると考えている。